

シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷 —キルギス共和国アク・ベシム遺跡の調査(2024)—

櫛原 功一 帝京大学文化財研究所准教授
山内 和也 帝京大学文化財研究所教授・所長
平野 修 帝京大学文化財研究所研究員

The Foundation and Development of Suyab, an Ancient Multicultural Trading City of the Silk Road: Excavation of Ak-Besim, Kyrgyz Republic (2024)

KUSHIHARA Koichi Associate Professor, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
YAMAUCHI Kazuya Professor, Director, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
HIRANO Osamu Researcher, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

櫛原
功一
山内
和也
ほか

1 調査の概要

帝京大学シルクロード学術調査団(団長 山内和也)およびキルギス共和国国立科学アカデミーは、2024年4~5月、キルギス共和国のアク・ベシム遺跡(スイヤブ、碎葉、[図1](#))において共同調査を実施した。調査地点はアク・ベシム遺跡シャフリスタン1の東方キリスト教会址(AKB-8区)、シャフリスタン2(碎葉鎮城)の中枢部(AKB-15区)、および第0仏教寺院(推定大雲寺、AKB-21区)である。

アク・ベシム遺跡は5、6世紀から12世紀頃の都市遺跡とされている。ソグド人の交易都市として出現し、7世紀前半には西突厥の政治的拠点として栄え、西暦630年に玄奘三蔵が訪れたことでもよく知られた遺跡



図1 1967年の航空写真

である。唐が679年に安西四鎮のひとつ「碎葉鎮城」をソグド人の街に隣接して建設し、二つの都市が相接することとなったが、唐の支配は短期間であった。8世紀の初めに唐は撤退すると、突騎施(テュルギシュ)や葛邏祿(カルルク)がこの地を拠点としたのち、10世紀代にカラハン朝が台頭してイスラム化するが、やがて政治的、経済的な中心はベラサゲン(プラナ遺跡)やナヴィカト(クラスナヤ・レーチカ遺跡)に移る。よって11世紀頃には著しく衰退し、都市機能を失っていった。

この遺跡における共同調査は2016年より継続的に実施され、2018年までシャフリスタン1の街路区(AKB-13区)で調査を行い、2021年より東方キリスト教会址(AKB-8区)の調査を行っている。また、シャフリスタン2では2017年より中枢部(トリトクル、AKB-15区)の調査を開始し、瓦帯や漢字の文字瓦の発見(2017年)、卵石散水の発見(2018年)などが相次ぎ、建物基壇周辺の調査を進めるとともに、本年より新たに龍谷大学チームと合同で第0仏教寺院(AKB-21区)の調査に着手した。それらの調査区のうち、ここではAKB-8区、AKB-15区の2地点の調査概要について報告し、AKB-21区のうち21b区の詳細については、龍谷大学の岩井報告に委ねることとする(本書参照)。

2 AKB-8区(東方キリスト教会址、[図2](#))

東方キリスト教会址はシャフリスタン1の東南隅に位置し、1996~98年にG.L.セミョーノフらによる発



図2 AKB-8区全景

掘調査で主要な建物構造が明らかになっている。そのさいに出土したコインや壁画のモチーフなどを根拠として、10～11世紀のキリスト教会と認識され今日に至っているが、この年代観には少なからず疑問が呈されている。共同調査団では、教会の創建年代や周辺の構造を明らかにするため、2021年に教会南壁と城壁間、2022年には教会東壁と城壁間の試掘、東壁周辺の居住痕跡を調査し、2023年には教会東壁と城壁間の壕構造を確認し、教会内の中庭2箇所での試掘調査を実施した。本年は教会東壁の外回りの構造解明、および路面状遺構が確認された中庭のTr.06においてトレンチを拡張し、建物痕跡を明らかにすることを目的に調査を実施した。

教会址の外側、教会と城壁の間には、昨年までの調査により壕の存在が推定されている。動物骨の年代測定により、壕下層の年代は7世紀後半代、壕の上層は11～12世紀代と推測されたことから、壕が城壁の構築時に掘削され、その土砂で城壁が構築された可能性が高いと考えられた。また壕の立ち上がりは教会の壁際に迫っていることから、壕が存在した状態で教会が建設されたとは考えにくく、壕が埋められたのち教会が作られたと考えられる。10世紀代には教会が存在したことが明らかなので、壕は8～9世紀代に埋めされたと考えられている。このように、これまでの調査の結果、壕の掘削、城壁の構築、壕の埋め戻し、教会建設、廃絶に至る一連の過程が判明しつつある。また11世紀代には教会外壁周辺において多量の鉄製小札類や武器類が出土し、中には金貼りの大型品が存在することから、教会と武器、武具の出土との関連性、教会廃絶後の建物の再利用など新たな課題が提起されている。

2024年の調査では、教会址東壁の外壁側面が長さ



図3 土管列

43 m以上にわたって検出され、大規模な複合体を形成する現状の教会建物は、南側から北側へ連結するようにして規模を拡大していった様子が認められた。また教会東壁では、外壁に沿って盛り土で構築された幅約2 mの通路状の回廊構造が建物を囲むように全周することが判明した。この構造は、壁構築ののち10～11世紀段階で土器や灰を多量に含む土を盛り上げ、段構造としたもので、教会建築当初の構築ではなく、補修による構築とみられる。2022年の調査では、この回廊面および周辺に炉を伴う生活痕跡が見つかり、床面として調査が行われたが、今回の調査では、この回廊面に教会の壁の補修に用いたと思われる日干しレンガを集積したピットや、壁際を利用して作られた竈や炉が検出された。さらに回廊の裾周りには回廊に平行して素掘りの1号溝が発見されている。教会南壁側についても同様の溝が想定されたことから遺構確認をしたところ、礫を多数用いた配石の下層に排水のための土製円筒管9本が連結された3号溝が検出された(図4)。土管は長さ48～54 cm、径は狭い方が11～14 cm、広い方が19～21 cmとラップ状を呈していて、口径が大きい方を西側にしてごく緩いカーブを描きながら、西から東へ傾斜している。類似した土管列は、セミョーノフの調査時に複合体Aの北側で見つかり、中庭から東壁出口を通して教会外に排水する構造を示している。今回の排水管は教会南側に埋設された土管列のうち、東端の一部のみの発見のため全体構造は不明であり、土管列の起点がどこなのか不明であるが、複合体Aのどこかの部屋からの排水を目的としたものと思われる。教会南東角にはワイン醸造に関わる部屋があることから、醸造関連、あるいは生活排水のための施設であろう。土管のひとつには焼成前ヘラ描きで線画の文様が認められ、コウモリかトリの



図4 線画のある土管



図5 ウマ骨の出土状況

ような文様を大きく描いている。その文様面が埋設時に意図的に上に向くように設置されていた(図5)。なお、土管は輪積み技法で表面を斜めにナデ調整して製作されており、AKB-21区で出土した赤丸瓦にも同じ製作技法のものがあり、丸瓦との製作技法上の関連がうかがえる。

また教会東壁の中央、回廊と城壁の間には、底面に円礫を敷いたような溝状の遺構面があり、覆土中からウマの骨が数個体分発見された。それらは比較的骨格の位置関係を留めているのが特徴的で、ウマの解体場所、もしくは骨の捨場と考えられ、年代測定では10世紀後半～11世紀前半の年代を示している。また付近にはイヌの骨、土器や獣骨などの廃棄物が集中して出土した範囲があり、カラハン朝時代での教会内でのゴミが教会外に廃棄された捨場の様相を呈している。土器類には握り把手をもつ赤彩長頸壺が目立ち、教会で使用された可能性のある土器と思われる。

中庭(Tr.06)地点は、2023年のトレンチを複合体Aの北壁まで拡張した調査区で、調査の結果、壁に面した小部屋を仕切る南北方向の仕切り壁と、北壁の直下



図6 Tr.06の建物跡

にスーファが設置された部屋構造が明らかになった。北側に壁がなく、中庭中央の通路に面してコの字状に開放した部屋と推定され、それらの部屋構造が壁に沿って連続して配置されていたことが想定される。床面は2面を確認し、11世紀代と推定されたが、なお下層には路面に対応するような複数面の床面の存在が想定でき、教会の創建段階の床面を確認するための調査を今後も行う予定である。

3 AKB-15区(シャフリスタン2中核部)

AKB-15区では、1号基壇に接して存在する大型土坑(Pit.10)の調査を行い、その形態や機能、1号基壇との関係の解明を目指すとともに、1号基壇を取り囲むように存在する回廊状遺構(仕切り壁)などの確認のための調査区を設定した。

Pit.10は2022年の調査で初めて確認された大型ピットで、2023年の調査で南北4m、深さ1.5mまで掘り進め、本年の調査では完掘に至った。その規模は東西5.5m、南北9.1m、深さ約3mで、平面形は南北に長い楕円形、断面はすり鉢状を呈した非常に大きなピットであり、北側には縦坑状の円形ピットが基壇側面にかかるように重複している。ピット覆土の堆積状況は、表土から約1.5mまでは水平に堆積層がみられ、その下層の1.5m～3mの深さではレンズ状堆積を示し、炭化物層と堆積土層の互層となっている。覆土中からは炭化物層を中心に多量の土器、瓦、動物骨、青銅製のコインなどの金属製品、特殊遺物が発見され、時期的にも限定的な一括性の高い資料として重要な発見となった。注目される遺物としては、これまでにも真鍮製十字架などが見つかったが、鬼面文瓦、石製品では白玉の製品、瑪瑙製装身具、化粧道具とみられる石製のピン、骨製櫛、るつぼなどの金属加工関連



図7 AKB-15区全景

遺物など、建物が焼失したのちに片付けられたとみられる多量の屋根瓦のほか、女性が使用したであろう装身具や日常品が多数発見され、7～8世紀代の軍事拠点としての碎葉鎮城内での日常生活の側面を伺わせる資料が出土している(図9～14)。また珍しいものではヒトあるいはイヌのものかと思われる糞石がある。この巨大なピットの機能としては、水を集める貯水穴、もしくは井戸ではなかったかと推察されているが、最下層面についてはさらなる調査を行い、今後明らかにする予定である。このピットは、焼失した建築材やゴミ類を片付けるための廃棄坑として転用され、最終的には埋め戻されたもので、動物骨による放射性炭素年代測定によれば、下層が7世紀前～中、上層が8世紀後半の年代を示している。1号基壇に建物が存在した段階で、基壇前にピットが開口していたとは考えにくく、ピットの構築、廃棄時期は基壇建物が失われた直後かとも思われるが、今後の調査をまって再検討したい。

また1号基壇周辺に設定したトレンチでは、基壇周辺に幅3～6mの仕切り壁が基壇を囲むように四方に配置され、さらに南北の方向に仕切り壁が伸びていることが推測された。南門の南面東側では、2023年同様に回廊南側に瓦帯や碑文の発見が想定されたが、瓦帯の続きはなく、碑文片の文字資料については新たな発見はなかった。そのほか、2018年に発見された卵石散水の続きを確認し、南に伸びた石敷が西側に屈曲することが確認されている。

4 おわりに

2024年の調査では、AKB-8区で10世紀代以降の教会東壁および回廊や溝を伴う構造を把握し、また中庭の壁ぎわには仕切り壁で区切られた開放的な部屋構



図8 Pit.10調査風景

造が壁に沿って連続することが推定された。またAKB-15区の大型ピットに関しては、建物基壇の南面に一時的に大型ピットが掘削され、火災後のゴミ片付けの穴として利用されたもので、出土した多彩な遺物は唐代の碎葉鎮の様相を明らかにする貴重な資料を得ることができた。そこから垣間見ることができるのは、前線基地における女性を含めた日常生活の営みであり、唐代のさまざまな生活用具や金属加工に関連した遺物などが発見されている。また基壇建物はそれを囲む回廊状遺構によって区画されていることが確認され、中枢部の建物配置の様相が徐々に明らかになりつつある。回廊状遺構は叩き締めた盛り土で形成されたもので、基壇と同様に基壇外装を伴わない急ごしらえの印象を与えている。

そのほか本報告では詳しく触れなかったが、本年よりAKB-21区の調査を開始し、大雲寺と推定される寺院伽藍の建物基壇にかかるようにトレンチが設定された。これまでもAKB-15区では基壇周辺や基壇面から布目瓦が多量に出土し、碎葉鎮の中枢部における軒丸瓦、軒平瓦、鬼面文瓦の構成、平丸瓦の形態的、技法的内容はおおむね明らかになっているが、AKB-21区の調査区ではAKB-15区と全く同じ様相の布目瓦、軒瓦とともに、8世紀以降に製作されたと考えられる布目のない赤焼き瓦(赤瓦)が多数出土した。赤瓦にはロクロ目をもつもの、輪積み成形のものなど、いくつかのタイプがあり、唐の撤収後、8世紀後半～11世紀代に現地で製作された瓦と思われる。したがって碎葉鎮消滅後も推定大雲寺もしくは名前を変えたであろう仏教寺院はその地にしばらく存続したことになり、寺院の構造や機能とともに寺院としての存続期間の解明などの課題があり、今後の調査の進展に期待される。



図9 鬼面文瓦



図10 瑪瑙製垂飾



図11 白玉製品



図12 ピン状石製品



図13 軒丸瓦



図14 花卉状口縁の土器



図15 花柄の敷石(南側)

なお、この報告は JSPS 科研費 JP21H04984 (基盤研究(S) 研究課題名：シルクロードの国際交易都市スィヤブの成立と変遷—農耕都市空間と遊牧民世界の共

存一、研究代表者：山内和也)の助成を受けた成果の一部である。

参考文献

- ・帝京大学文化財研究所 キルギス共和国国立科学アカデミー 2020 『アク・ベシム(スィヤブ)2019』 帝京大学シルクロード学術調査団調査研究報告3
- ・帝京大学文化財研究所 キルギス共和国国立科学アカデミー 2021 『アク・ベシム(スィヤブ)2018』 帝京大学シルクロード学術調査団調査研究報告2
- ・帝京大学文化財研究所 キルギス共和国国立科学アカデミー 2022 『アク・ベシム(スィヤブ)2016・2017』 帝京大学シルクロード学術調査団調査研究報告1
- ・山内和也・岡田保良 2020 「スィヤブ(アク・ベシム遺跡)のキリスト教会—第8号遺構：キリスト教会複合体—」『帝京大学文化財研究報告』第19集 pp.247-319
- ・榎原功一 2024 「アク・ベシム遺跡第1 シャフリスタン AKB-8 区の発掘調査(2024)」『シルクロード学研究会 2024 夏 資料集』 pp.1-8
- ・平野修 2024 「2024年 AKB-15の調査報告」『シルクロード学研究会 2024 夏 資料集』 pp.9-18